

工業学院図書館
蔵書章

高野 亘
Takano, Wataru

講談社

たかの
わたる
高野 亘

一九五四年二月三〇日、北海道に生まれる。一橋大学大学院博士課程修了。現在、成城大学、立正大学等で、非常勤講師をつとめる。本書により第33回群像新人文学賞を受賞。

コンビニエンス ロゴス

1990年7月16日 第1刷発行

著 者 高野 亘

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二二／郵便番号一〇二〇一
電話東京(〇三)九四五―二二二(大代表)

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定 価 一二〇〇円(本体一一六五円)



落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料小社負担にてお取り替えます。なお、この本
についてのお問い合わせは、文芸図書第一出版部あてに
お願いいたします。

© Wataru Takano 1990, Printed in Japan

目次

プロローグ	7
◆	
第一部 哲学者への道	9
◆	
亀救済委員会	11
◆	
Aプロの歴史	75

第二部 アイアンレディへの道

◇

◇

オン・ユア・マーク

139

◇

スパート、あるいはスタート

◇

160

137

装画 たむらしげる

装幀 永原康史

コンビニエンス
ロゴス

プロローグ

彼とけんかしたのは二カ月前だ。わたしはその場で彼に婚約破棄を宣言した。

彼は自分の世界を持っている、自分の意志に反することを断固として拒否する強さも持っている、自分が望んでいるものも知っている。そのうえわたしの望むことも瞬時に察し、いつだってお互いが我慢しあわず、しかもお互いが相手に譲歩させたという重荷も感じずにすむ合意点を見いだしてくれる。そんな彼のどこに不満があったんだろう。もしかしてその不満は彼に対するものではなく、わたし自身に対する不満だったんじゃないだろうか。だからこそ彼はわたしのそんな不満をどうすることもできなかったん

じゃないだろうか。わたしは彼に嫉妬していたのかもしれない。わたしが自分の世界を持てず、自分の意志も持てず、自分が何を望んでいるのかさえもわからないから。

第一部 哲学者への道

亀救済委員会

1

「だれもが大人になる前はこどもであるわけです。理性を自由に行使できるようになる以前、つまりこどもであるころから、だれもが教育・慣習等に代表される伝統的権威によってさまざまなことを真なることとしてインプットされ続け、そうすることで大人になってきた。そして具体的状況の中では、そのインプットされたものに従って、〈これは真〉、〈これは偽〉と判断している。きみたちだってそうだ。しかしこの判断を下しているのは

ほんとうに自分なのかということが問題にされなければならない。というのも、この場合実際には自分で判断しているのではなく、伝統的權威によって判断させられているにすぎないからだ。だからといって自分で判断していなかったということの責任は、この時点ではまだきみたちにあるわけではない。なにしろまだ自分で理性を行使して判断するだけの能力がなかっただけのことなんだから」

一、二年生相手とはいっても一応は法学部の教養科目なんだから、ここらで法律用語でも入れてやろうか。ただの能天気な哲学講師という認識も少しは変わるかもしれない。

「まあ、有責任の欠如、つまり責任能力がない状態だったということだ。しかしいったん理性に目覚めたら、そこからはきみたちの責任が生ずることになる。今まで真であると信じてきたもののすべてを、一度は自分の理性によって検証しなければならぬことになるというわけだ」

〈理性的〉という言葉ならともかく〈理性〉なんて言葉は、ここにいるほとんどの学生たちが一度も自分で使うことなく一生を終えることになるはずだ。

「そのときになっても相変わらず理性を行使せず、過去のリアリティだけを信じきって判

断させられているとすれば、今度こそそれはきみたち自身の責任になる。自分の理性の行使を怠っているという不作為の責任が、きみたちに帰されるということになるからだ」

ここまでくれば、あとはノートを見なくとも最後までもっていけるだろう。自分でなんとか満足できる程度の講義は三回に一回くらいの割りだが、きょうはその一回に入れてもよさそうだ。これで、気持ち良く夏休みに入ることができる。

「今まで真であると信じこんできたもの、なしくずしに作られた現実のすべてを、偽ではないかと疑ってみなければならぬときが必ず来る。そしてそのときこそ、理性をどう行使しても疑う理由を見いだせないものだけを真として受け入れる、という決意をしなければならぬ。このように疑うという方法を介して得られた明らかに真であるものだけを原理にして、そこからひとつひとつの具体的状況を検証し、新たな世界の実在性を回復していくことになるというわけだ。こうして理性によって再構成された現実だけが、ほんとうの意味での自分の世界を形成することになる。たんに伝統の中に自分の根拠を求めるだけでは、本当の自分の世界は求められない。伝統の中に本当に真であると判断できるものがあるときにのみ、その伝統は意味をもっているものであって、盲目的に伝統を信ずるだけ

では、たんに自分の世界を狭めているにすぎない。このように、明らかに真であるものを見いだすための疑いが、デカルトの「方法的懷疑」と呼ばれるものなわけです。

とまあ、前期の講義はここまでにしましょう。レポートの提出期限は厳守するように。おわり」

こうして僕の夏休みは始まった。

僕はこの休みのあいだに少し長めの論文を書きあげるつもりでいた。テーマは自己認識に関するもので、春からずっと構想を練りあげてきたものだ。参考になる論文も著作もほとんど読み終えているし、準備のノートやメモもずいぶんとってある。予備校の夏季講習も今年は許される最小限におさえてもらったし、時間は十分とれるはずだ。彼女とのことは気にはなるが、僕からはどうしようもない状態になってしまっている。いまは彼女の出方を待つしかない。彼女のことを除けば、気に懸かることはひとつだけだ。その件にしたって、論文執筆に差し障りがあるほどの問題じゃないし、それほど時間をくうこともないだろう。かえって気分転換にちょうどいいくらいだ。

このときまではそう思い込んでいた。